ネットワークの働きかけで、障害者を雇用

―岩手雪運（ゆきうん）株式会社―

職場ルポ

●特集● 就労支援ネットワーク

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

取材先データ

岩手雪運株式会社
〒025-0095　岩手県花巻市石神町77-3
TEL 0198-24-1515　FAX 0198-23-3980
http://www.yukiun.com/

就労支援機関データ

岩手中部障がい者就業・生活支援センター
しごとネットさくら
〒024-0094　岩手県北上市本通り2-1-10
TEL・FAX 0197-63-5791

就労支援機関データ

障がい福祉サービス事業 就労継続支援B型
花巻アビリティーセンター
〒025-0006　岩手県花巻市下似内17-55
TEL 0198-24-8011　FAX 0198-24-0363

岩手県社会福祉事業団 障害者支援施設
松風園
〒028-3171　岩手県花巻市石鳥谷町中寺林7-46-3
TEL 0198-45-3016　FAX 0198-45-3017

岩手障害者職業センター
〒020-0133　岩手県盛岡市青山4-12-30
TEL 019-646-4117　FAX 0198-646-6860

Keyword：高機能自閉症、就労継続支援 B 型事業所、運輸・物流業、障害理解、トライアル雇用、障害者就業・生活支援センター

POINT

① 就労支援ネットワークの連携
② 実習から障害者雇用を進める
③ 就職後も継続支援

岩手雪運 髙橋秀喜 専務取締役

初めて実習を受け入れる

シルバーとグリーンの車体に「FRESH LINE」の青文字が映える。「岩手雪運株式会社」は、1968（昭和43）年に設立された、チルドや冷凍の食品の配送を得意とする会社である。雪印の乳製品を運ぶことから創業したので「雪」の一字をとり、社名に。一連の雪印事件の影響を大きく受けたが、事件以前から将来は小口運送が主になるだろうと予測し、共同配送事業に移行しつつあったそうだ。東北自動車道花巻南インター近く、雪印の花巻工場跡地にある本社は、食品を中心とした共配品の青森、秋田、岩手三県への中継拠点となっている。

従業員370人。会社は髙橋さん一族の経営で、専務の髙橋秀喜さんは創業者の弟で、現社長の叔父。常務の髙橋伸光さんは現社長の長男で、将来は三代目を継ぐ。

まず「FRESH LINE」に込めた思いを常務の髙橋伸光さんに聞いた。

「食品をフレッシュに運ぶという意味だけでなく、頭文字に会社の経営方針を当てはめました。Fairはルールを守る、Regionalは地域に根ざした、Evolutionは進化し続ける会社を目ざす、Satisfyは顧客・従業員満足、Harmonyは和をモットーにという意味を込めています」

手や足が少し不自由でも、配送車の運転に支障がない人たちは働いていたが、障害者雇用を意識し始めたのは1年前のことだった。専務の髙橋秀喜さんは、「正直なところ、当時はあまり真剣に取り組んでいなかった」と話す。

「運送会社で点から点の物の移動が主でしたが、3PL（保管、仕分け、配送など）の事業を受託するようになって、運転手以外の仕事が出てきました。社内で障害者の人数が足りないという話はしていましたが、それでも障害者を雇用しようとは思っていませんでした。そのとき、多田さん（後出）の企業訪問を受け、『障害者の実習をお願いできませんか』といわれて、雇用率が上がったこともあり、働く場もありそうだと真剣に考えるようになりました」

常務の髙橋さんも、「障害の種別とか、障害者の状況についてはよくわかりませんでした。指が少し不自由な人も障害者なのか、精神障害の度合いによってわれわれの業務にどういう支障があるのかなど、考えたこともありませんでした。専務がお話ししたように、仕事が多様化して、障害者を雇用することが考えられるようになったのだと思います」

岩手雪運 髙橋伸光 常務取締役

多田洋子さんは、岩手中部障がい者就業・生活支援センター「しごとネットさくら」の就労支援ワーカーとして岩手雪運を訪問し、障害者の実習を引き受けてほしいと働きかけた。その結果、高機能自閉症がある照井一成（てるいかずなり）さんの実習が決まった。

しごとネットさくら 多田洋子さん

就労部会で企業開拓、マッチング

しごとネットさくらは、岩手県内9つの福祉圏域の1つ、北上市、花巻市、遠野市、西和賀町を対象とした障害者就業・生活支援センターとして、2008年に

開設された。この3市1町それぞれに地域自立支援協議会があり、地域の就労移行支援事業所、就労継続支援事業所、特別支援学校、病院、相談支援事業所、ハローワーク、商工会議所、市町の福祉行政などがメンバーとなっている。4つの地域自立支援協議会をつなげるのが「さくらネット」で、調整役はしごとネットさくら副所長で主任就業支援ワーカーの小田島守さんだ。

「日常的なネットワークの母体は地域自立支援協議会で、その中にさまざまな部会をおき、活動しています。地域には本人がいて、支援機関が存在し、企業も存在します。お互いが地域の資源と考えれば、ネットワークができると思います」

今回は、花巻市地域自立支援協議会の就労部会（以下、就労部会）を例に、就労支援のプロセスをたどっていく。就労部会には企業開拓、支援者や当事者のスキルアップ、広報などのグループがあり、

しごとネットさくら 小田島守 副所長

部会長は、就労継続支援B型事業所「花巻アビリティーセンター」係長で生活支援員の戸田康雄さんが務めている。

就労部会では、まず就労支援ワーカーと協力して実習の受入れ企業の開拓に取り組み、同時に就労移行支援事業所などから就職希望登録者を募り、本人または家族の了解を得たうえで、コミュニケーション・指示理解・身だしなみ・文章理解……など12項目の個人プロフィル表を作成。さらに本人がどのエリアでどういう仕事を希望しているかなどを記した個別登録票も準備する。

これらの情報と実習の受入れを表明してくれた協力事業所情報シートを照らして、マッチング会議を開き、業務内容、本人の希望職種、作業適性、通勤手段などを考慮して、実習候補者を絞る。候補者が決まったら、本人が利用している事業所の就労担当者と職場実習確認書を作成、送迎、支援などの支援体制を確認する。

就労側の準備が整ったところで、個人プロフィル表を持参して協力事業所に実習を依頼し、OKになれば実習を開始。実習後には、会社からの評価と支援者の評価、本人の振り返りなどをまとめて就労部会に報告する。

この間の取組みをさらにスムーズにするために、戸田さんの提案で就労部会では「実習前・実習中・実習後」の留意事項をまとめた実習手順書も作成した。

花巻アビリティーセンター 戸田康雄係長
（就労部会の部会長）

「就労部会のメンバーは、就労移行支援を日常的に行っている事業所もあれば、就職の支援？と首をかしげる作業所もあります。私のところは授産施設から就業継続支援B型事業所に移行しましたから、一般企業で働けるように8時間働ける体力、集中力、協調性などを訓練して就職に備えています。ただ、就労支援はほとんど行ったことがありませんでした。実習手順書があれば、初めて就労支援に取り組む事業所もわかりやすいと思いました」

小田島さんは就労への取組みが積極的に行われるように支援してきた。

「『採用してください』では、尻込みされる企業もあるかと思いますが、『実習をお願いします』という切り口だとアプローチしやすいと思います。企業で実習できることは、障害者にはとてもいい経験になります。ネットワークの機能ができている花巻市ではB型事業所からも就

岩手雪運で働く
照井一成さん（25歳）

職につながっています」

文字ではサラッと書けてしまうが、実際にはきめ細かな積み重ねをしてきたことが伝わってくる。

職場実習を経て、就職へ

花巻市就労部会の支援を受けて、照井一成さん（25歳）は岩手雪運に就職した。就職までのプロセスを追うと、普通高校卒業後、アルバイトをしたが1週間ほどでうまくいかず、在宅に。そのころ高機能自閉症が判明し、2011年から花巻アビリティーセンターに通い、企業の部品組立てなどの受託作業がメインの同センターで、自動車に使われるラベルなどの検品、袋詰め作業を担当。その後、就職したいという本人の希望を受けた戸田さんが、就職希望者に登録した。

「作業ぶりはまじめです。集中力が高く、黙々と作業をしていました。ただ、自分なりのこだわりがありますので、本人のそういう部分と取引先からの品質基準をすり合わせて、厳しい納期に間に合わせるように指導してきました。世間話や雑談するのが苦手ですが、作業に関しては『ホウレンソウ』を徹底しましたので、そこは強みかなと思っています」

マッチング会議で、照井さんは実習生に選ばれた。実習の内容は、低温倉庫の中でシュークリームなどの賞味期限のシール張り、お菓子などを入れるコンテナの洗浄、仕分けなどだ。照井さんは実習期間中、アビリティーセンターの朝礼に出て、戸田さんと実習日誌を確認後、会社に送ってもらった。戸田さんは、センターに通ってくる訓練生の作業指導との両立が大変だったという。

「送り出すときに、挨拶をしなさい、わからないことは聞きなさい、間違ったことはすぐに報告しなさいなど、具体的な例を出して話をしました。車の中でも、最初のアルバイトで腰を痛めていたので、腰は痛くないかとか、いろいろ話しました。彼も、部長が一緒にお昼を食べてくれるなど、会社の状況を話してくれました。モチベーションを維持できるように励まし、話を聞いたりしましたが、本人が頑張ったと思います。実習を延長するたびに確認すると、『続けます』と答えました」

岩手雪運との橋渡し役を担った多田さんも支援に入った。

「実習は順調だったと思います。作業は早くはないのですが、ミスがないのが評価されました。挨拶もきちんとできて、ホウレンソウもできていました。企業には照井さんにどう接したらいいかをお伝えし、照井さんには企業が直接本人にいえないところを『こんな感じみたいよ』と伝えました」

1週間、1週間、10日間と3回の実習が終わり、本人、戸田さん、多田さん、会社側とで総括を行い、8月12日からトライアル雇用を開始することが決まった。そこで、岩手障害者職業センターの障害者職業カウンセラーの刈屋あい子さんが関わった。

「高機能自閉症の方の受入れが初めての企業なので、一社員として受け入れるときにどういうことを望むか、おうかがいしたら、『作業の理解はできているけれど、ゆくゆくはスピードを伸ばしていきたい。自分から話すタイプではないので、抱え込んでしまって辞めてしまわないか』などの心配をお聞きしました。実習の評価が高かったので、長く働いてほ

支援にあたった岩手障害者職業センターの刈屋あい子障害者職業カウンセラー（左）と、松風園の髙橋由起子ジョブコーチ

しいとの思いがあってのことだと思います。本人とのかかわり方とか、何かあったときは問題解決のために相談することをお約束して、髙橋ジョブコーチと当センターのジョブコーチの2人体制で訪問してきました」

支援を担当した就労部会の構成事業所である岩手県社会福祉事業団障害者支援施設「松風園」の主任生活指導員で、第1号ジョブコーチの髙橋由起子さんはいう。

「コミュニケーションに課題があったので、定期的にジョブコーチが入ったほうがいいだろうと依頼がありました。本人とコミュニケーションをとりながら、休憩時間に仕事の感想などを聞いたり、1つの仕事に夢中になると周囲や時間配分ができなくなるので、職場の方に状況を聞きながら、本人にさらりとアドバイスをしたりしています。誤解が生じるかどうかは紙一重ですから、一般常識のフォローも大事です。会社にも必要な支援ができればと思います」

定期的にジョブコーチとして指導を行っている髙橋由起子さんと話す照井さん

就職前、就職後と、就労支援の連携がしっかり行われている。

トライアル雇用から戦力に

職場実習からまもなく1年。「仕事が好きです」と答えてくれた照井さんは、仕分けを担当している。仕事は9時から16時半か17時まで。チルドや冷凍品を扱うので、倉庫内は1年を通じて6度に保たれている。商品のお菓子が箱の中で動かないように、段ボールを使って〝養生〟もしっかりできる。「得意な仕事は、仕分けです。お菓子をつぶさないように気をつけています。午前中は折畳み式のコンテナを拭いて、午後からは洋菓子メーカー・モンテールのお菓子と、弁当屋のドリンクの仕分けをします」

取材を受けると聞き、散髪に行き、きりっとして登場してくれた。家族からは「言葉に気をつけなさい」といわれたとか。寒さ対策の防寒コートも似合っている。最初の就職に失敗したため、家族は心配していたそうだが、着るもの、毎日のお弁当など、さりげなくフォローしていることがわかる。

高卒後に運転免許を取得した照井さんは自家用車で通勤し、給料はほとんど貯金している。楽しみは漫画の本を買ったり、たまにゲームをしたり、戦国武将の歴史小説を読むこと。なかでも伊達政宗が好きだそうだ。

「働き続けられそうですか」の問いに『ハイ』と即答。「職場の人たちは、みんな親切です。後輩が入ったら、できる限り頑張ります」

専務の髙橋さんは、「車で通うとは思っていませんでした。普通の人と変わらないのではと思いました。まじめで、これをしてほしいと指示すると間違いなくやります」

常務の髙橋さんは、同じ休憩室で昼食を食べていた。

「彼の顔をつぶさないように、声をかけて重荷にならないように接してきました。ご飯の前に必ずトイレに行き、丁寧に手を洗う。昼食後は漫画本を読んでいます。仕事は、健常者は何をしているのだろうと思うくらい、しっかりやっていますよ。作業場所は結構危険をはらんでいるので気をつけてほしいことと、特に

夏場は外との温度差がある場所ですので、体調管理に気をつけてほしいですね」

会社が漫画本を揃えてくれていることを、照井さんはジョブコーチの髙橋さんに伝えていた。「観察力があり、話の中身はおもしろいですよ。会社には寛容に見ていただいています」と髙橋さん。常務の髙橋さんはまた、こんなエピソードを教えてくれた。

「指示したとおりに動いてくれるのですが、ほかの作業員がサボっていると真似してサボるんです。みんながたばこを吸っていると、手を抜いてもいい時間だと彼なりに思い、作業の途中で止まるんですよ。部長が注意したらすぐ直りましたが、気がつかなかったうちの問題点を彼が見せてくれるので、逆にいい勉強になったと思います」

就職後も支援、成長を見守る

照井さんを送り出した戸田さんは、就職後の成長を感じている。多田さんも、「実習を積み重ねて、仕事にも環境にも慣れつつ、自信を持っていったのだと思います。みなさんの小さなフォローが積み重なって大きなものになり、いまの彼があるのだと思いました。これからは、与えられている仕事をスピードアップできるように、また健康で休まないで定着してほしいです」とエールを送る。

ジョブコーチの髙橋さんは、「休まないのが基本ですね。本人はいまの仕事が好きだといっていますが、目標がないと楽なほうに流れるのは簡単です。いきなりはできませんが、目標を持って次のステップにいければと思います。もし今後、彼のような人がもう一人増えれば、自分の知っていることは教えていくだろうし、先輩として意識するところもあると思います」

専務の髙橋さんは、就労支援ネットワークがあったことは心強かったという。

「初めての経験でしたし、うまくいかなかったら、双方が気まずい思いをします。実習をしてトライアル雇用をすると、働けそうかどうかの判断ができますから、いい方法だと思います。雇用後も、知らない部分は多いと思いますので、フォローがあったほうがいいと思います」

仕事量が増加し、仕分け作業の人員も不足しているそうで、２０１４年上期に従業員を10人ほど募集するとお聞きした。「彼のような仕事はまだあると思います。照井君ぐらい働いてくれるのであれば、雇いますよ」と専務、常務のおふたり。前向きなメッセージに、会社としての理解が伝わってくる。

初めて雇用した障害者がうまく定着できるかどうかは、企業のその後の障害者雇用の取組みに影響するケースが多い。低温倉庫の中は寒かったが、暖かい雰囲気の中での取材だった。この取材を機に、企業と就労支援ネットワークのつながりが少しでも強くなったとしたら、とてもうれしい。

照井さんが就労をめざして訓練に励んだ福祉施設、花巻アビリティーセンター